

毎日歌壇

水原 紫苑 選

雲雀はときに声を追いこし時間とはふるふるの窓に
すぎない

東京 碓井やすこ
〈評〉詩歌では時に修辭が肉体となる。上の句と下の
句それぞれに透明な肉体が生きている。声を追いこし
て飛んで行く。時間がふるふる、そんな世界へ。

早春のねむりの扉を押しあけて制服のまま友だちが来る

加古川市 石村 まい
〈評〉制服のまま来た友だちには、ねむりの部屋でし
か会えないのかもしれない。

「出生の銀河を確認するためにあなたのつむじを見せて
ください」

横浜市 砂月 七
こんばんはあの日に降った雪です、と言はないままの扉
の白猫

見附市 有村 桔梗
降る雪のしづけさおもふわが鼓動、呼吸によりて穢さる
るその

武蔵野市 八田 絵砂
振り返る勇気もなく離れゆく強さもなく空は真っ青

神戸市 中林 照明
夢のなかの修道院を包囲する雪とはつまり祈りの極み

千葉市 芍 薬
何度でも満月の空を見てしまし残像ばかりでもう歩けな
い

岐阜市 山上 秋恵
化石だった記憶を時折よび醒ましアスファルトは鈍く光
をはなつ

フランス 小仲 翠太
憧れの人はアインシュタインです量子もつれが証明され
ても

倉敷市 中路 修平

伊藤 一彦 選

誤解だと言えずにずっと責められて目のなかの星失くし
てしまふ

東京 石川 真琴
〈評〉責められてなくなった「目のなかの星」とは他者
を信頼する心だと思ふ。信頼の心をなくすと、すべて
が暗く見えてしまふのだ。

ピンク色のパンツの話で老女らのガールズトークが最高
潮に

東大阪市 タカエレイコ
〈評〉作者は医師らしいので、老女たちは患者だろう
か。温かいまなざしのユーモア。

カステラのごとく口の水分をかつさうおしゃべりな君
とトーク

国分寺市 横林なな子
膝けりと罵声とヒンタと腹パンが俺の最初の出囃子だっ
た

東京 小見ひかる
偽善っぽい青に囲まれかこまる他人の私の証明写真
をしどりが池のなかに寄り添へり相手を監視するため
といふ

フランス 小仲 翠太
安心した 波打つゴッホの糸杉は私の鬱と形が似ていて
相模原市 榎本 ハナ

よく見れば幼き熊を傍観者「熊だ熊だ」と騒ぎ立てたり
胸ぞらし俺は無欲と言う人に九人の孫と二人のひ孫

千葉 阿部 尚子
手をつなぐ親子の横を通り過ぎあるかもしれない未来を思
う

東京 青木 公正
川崎市 水 面

米川千嘉子 選

若き頃別れし人の母逝けり通夜の列ありて我なつかしむ

島根 重親 映人
〈評〉自宅での通夜ならなおのこと、斎場での風景で
も心情が思われる。別れた人もその母も、自身も若か
った日がよみがえる。

黒電話鳴りて階段踏み外すも根性で出たり昭和の吾は

幸手市 中村 早苗
〈評〉携帯電話やSNSのない時代。下句がユーモラ
スだが、結構リアル。

顕微鏡のレンズを覗き込むように観察される最終面接

横浜市 友常 甘酢
いま髪を洗ひしことも忘れたり職場で声を荒げし夜は
口にては我にとつてい勝てぬ夫歯きしりをして予を収め
る

高崎市 樋浦マサエ
車中泊みたいに生きて登山口近くの星をつかんでみたい
長岡市 三月 とあ

まんまるな地球の表面角ばかり四角い街を四角に歩く

伊丹市 岡本 信子
いつの日も巡回中のままであるオモチャみたいな夜の交
番

東京 新井 将
母を知らず父に抱けつつ育ち来て玉子とつうというをい
ただく

東広島市 藤川 幸雄
不揃いな日々を両手で整えてそれでもこぼれ落ちたら短
歌

東京 夏目 そよ

(おことわり)

歌壇選者の加藤治郎さんは都合によりお休みし、
他の選者3人で選歌を行います。ご了承ください。

投稿規定

はがき1枚に
選者を指定し、
未発表の自作を
2首・2句まで。住所、氏名、年齢、
職業、電話番号を明記し、宛先は
〒100-8051 (住所不要) 毎日新聞
学芸部、短歌は「毎日歌壇」、俳句

は「毎日俳壇」、〇〇先生(希望選
者名) 係へ。毎日新聞デジタルの投
稿フォーム(<https://mainichi.jp/kadan-haidan/>)でも受け付けて
います。

他媒体との二重投稿や、同一作品
を複数の選者に投稿するのは厳禁で

す。投稿は趣旨を変えずに添削する
ことがあります。

入選作は毎日新聞社の電子メディ
アやデータベース、アプリ「俳句で
ふてふ」で公開し、本社が作成また
は許諾した出版物やメディアに掲載
することがあります。